

長野県宝及び長野県天然記念物の指定等について（案）

文化財・生涯学習課

文化財保護条例（昭和 50 年長野県条例第 44 号）第 4 条第 1 項、第 30 条第 1 項及び第 31 条第 1 項の規定により、下記のとおり長野県宝及び長野県天然記念物に指定し、並びに長野県天然記念物の指定を解除するものとする。

記

1 長野県宝に指定する文化財

名 称	員 数 等	所 在 地	所有者の住所及び氏名又は名称
にやくいち おう じ じんじゃ かののんどう 若一王子神社観音堂 及び宮殿	1 棟 及び 1 基 附 棟札 1 枚	大町市大町 2097 番地	大町市大町 2097 番地 若一王子神社
こうきゅうじやくしどう 光久寺薬師堂	1 棟 附 厨子 1 基 内厨子 1 基 棟札 1 枚	安曇野市明科中川手 5773 番	安曇野市明科 中川手 5773 番 光 久 寺
ちょうこうじやくしどう 長光寺薬師堂 及び宮殿	1 棟 及び 1 基	安曇野市明科光 691 番 4	安曇野市明科光 691 番 4 長 光 寺

2 長野県天然記念物に指定する文化財

名 称	所 在 地	所有者の住所及び氏名又は名称
かり だ 雁田のヒイラギ	上高井郡小布施町大字雁田 789 番地 1	埼玉県狭山市大字 水野 1195 番地 3 呉羽 敏正

3 長野県天然記念物の指定を解除する文化財

名 称	所 在 地	指 定 告 示
はら 原のシダレザクラ	上水内郡信濃町大字平岡 994 の 1	昭和 42 年 5 月 22 日 長野県教育委員会告示第 4 号

長野県宝候補物件調査票

- 1 種 別 建造物
- 2 名 称 にやくいちおうじじんじやんのんどう 若一王子神社くうでん 観音堂及び宮殿 1 棟及び1基
つけたり 附 むなふだ 棟札 1 枚
(宝永3年「奉建立十一面観世音堂并宮殿」)
- 3 所在地 長野県大町市大町2097番地
- 4 所有者の住所及び名称 同 上 若一王子神社
- 5 管理者の住所及び名称 同 上

6 現 状

(1) 沿 革

若一王子神社は大町市の中心市街地の北端に位置し、スギ・ヒノキなどの社叢は県天然記念物に指定されている。

若一王子神社は、垂仁天皇の代に仁品王が社を建て伊弉冉尊を奉祀したのが始まりとされる。平安時代末期にこの地の豪族仁科氏が熊野那智神社の第五殿に祀られている若一王子宮を勧請し、以降、若一王子権現と称され、神仏混淆の社として、この地方の信仰を集めてきた。

慶応4年(1868)の神仏分離令によって、信濃では松本藩がもっとも激しい廃仏毀釈を実施し、「信濃日光」として広く知られた若沢寺(波田町)をはじめ無住・廃寺となった寺院が全寺院の74%に達した(『長野県史』通史編七)。そうした中で、若一王子神社では、三重塔は「物見ノ高樓」、観音堂は「神楽殿」とされ(「明治28年北安曇神社明細帳」、仏具を移転撤去し、建物の名称を変更することで破却を免れたようである。また、寺と神社に明確に区画すれば破却されないというので境界石を置いて免れたともいわれる(『大町市史』第四巻)。その若一王子神社の境内は、近世の境内絵図に描かれた若一王子大権現の神仏混淆の姿がそのまま残された貴重な遺構として今日に伝わっている。

若一王子神社の境内は南面し、鳥居をくぐった参道の正面奥に拝殿・本殿(重要文化財)があり、鳥居の東前方に三重塔(県宝)があり、拝殿の東側に観音堂(市有形文化財)、その東手前に社務所がある。また、拝殿への参道西側には護国神社・八坂神社がまつられている。

(2) 構造形式

概要

観音堂は、県宝の三重塔の後方に建つ。宝永3年(1706)の「奉建立十一面観世音堂并宮殿」の棟札が建築様式と一致し、宝永3年に建てられたことがわかる。

観音堂は、方三間の寄棟造、茅葺、妻入の仏堂で、前面に一間の向拝をつける。室内は内陣・外陣境を格子戸で仕切り、内陣に宮殿を安置する。前述の棟札から、宮殿は観音堂と同じ宝永3年に制作されたことが判明している。

幅具義氏の文書調査(『幅具義先生遺稿集ひとすじの道』幅具義先生遺稿集刊行会、平成15年、所収)により、元禄14年(1701)に三重塔建築費の調達が開始されたことがわかり、観音堂と三重塔の建立事業は一連のものとして企画され、観音堂が三重塔に先行して建立されたと幅氏は推定している。

修理に関しては、宝暦10年(1760)、文政2年(1828)、天保15年(1844)の棟札があり、いずれも屋根の葺替を主とした修理を示す。また、平成19年の修理で、箱棟に安政2年(1855)の墨書があり、棟札以外の年にも修理があったことが判明している。

構造形式

観音堂は方三間、寄棟造、茅葺、妻入の建物で、正面に一間の向拝（こけら葺）を付ける。

向拝は、玉石の上に几帳面取り角柱を立て、頭貫（木鼻付き）を通し、組物は三斗・実肘木（繰形付の台輪付き）とする。頭貫（水引虹梁）には極彩色の菊花を浮き彫りし、下端には輪宝文を彫る。木鼻は阿吽の唐獅子と象とする。頭貫上の中備は墓股（内部に雲・麒麟の彫刻付き）とする。母屋との繋虹梁はなく、大型の手挟（孔雀・迦陵頻・天女・鳳凰を浮き彫り）をいれる。軒は二軒、繁垂木で、地垂木には反りがつく。破風板にも唐草を浮き彫りする。

観音堂の軸部は、玉石の上に円柱（床下部分八角）を立て、地貫・足固貫を通し、縁長押・内法長押を打ち、内法貫・頭貫（木鼻付き）を通す。内法長押には植物を浮き彫りした極彩色の木製釘隠しを付ける。組物は、出組（拳鼻付き）とし、支輪をつける。中備は、中央間を墓股（内部に花鳥の彫刻）、脇間を撥束とする。軒は二軒、繁垂木とする。縁は四周に回し、切目縁とし、擬宝珠高欄を付ける。正面に木階三級（登高欄付き）を設ける。

平面は、奥行の中央より少し奥まって結界を設け、内陣に宮殿を置く。開口部は、正面中央を棧唐戸、脇間を半蔀とし、両脇の中央間は引違い板戸、内陣周りは板壁とする。結界は、右間を格子はめ殺し、左間を格子引き違いとし、中央間の格子・中敷居は取り外してある。内部の柱・組物・壁・建具なども彩色されている。天井は、外陣は中央を鏡天井として墨絵の龍を描き、両脇は格天井として格間に極彩色の花鳥を描く。内陣は格天井として格間に極彩色の花鳥を描く。

宮殿は、擬宝珠高欄を付けた台座の上に安置する。形式は方一間、入母屋造（正面）、妻入、横板葺で、全体を極彩色や摺漆塗りとする。軸部は土台に円柱を立て、腰長押・内法長押を打ち、頭貫（木鼻付き）を通し、台輪を置く。円柱には昇り龍・降り龍を描く。組物は三手先で、尾垂木を付け、正面は詰組とする。組物は斗を花文彩色とし、尾垂木は先端を龍の丸彫りや雲文の浮彫とする。支輪は板支輪で飛龍を描く。中備は墓股で内部に極彩色の蟹・海老・亀・蛸の彫刻を入れる。軒は二軒の板軒で、胡粉彩色の雲形を浮き彫りする。入母屋の妻は束立て板張りで、懸魚はかぶら懸魚とし、鰭と共に極彩色されている。正面の扉は両開きの棧唐戸とし、天女・日月と雲・花木を浮き彫りし彩色する。

宮殿内には長野県宝の銅造十一面観音坐像御正躰が安置されているが、元文5年（1740）「大町組神社仏閣帳」に「本尊丈六尺」とあるので、当初は、焼損した木造十一面観音立像（頭部を欠く残欠像高が136cm）が安置されていたことがわかる。

観音堂・宮殿の特徴

観音堂の特徴は、まず、変則的な間取りにある。一般的には側柱筋か、柱間の半分の位置に結界を設けるが、当社観音堂では、奥の柱間より2尺ほど手前という変則的な位置を結界としている。少しでも外陣を広くしたいという意識があったと推定される。

次に、向拝の虹梁や向拝内部の大型の手挟全体に浮き彫りを施しているのも特徴で、宝暦期（1751～63）前後の様式を先取りしている。また、向拝柱の木鼻が正面側に付くのは承応3年（1654）の当社本殿がずば抜けて早い事例である。正面側に木鼻が付くのは信濃一般には享保期（1716～35）以降であるので、当社観音堂の正面側の唐獅子も早い事例となる。唐獅子の木鼻は頭だけでなく胴体付きで、18世紀前期の好例である。こうした個性的な唐獅子は宝暦期以降には次第に定型化していく。

そのほか装飾的な部分をみると、墓股は上部に茨状の突起をつけるなど個性的な輪郭が特徴である。内法長押の釘隠しを木製彫刻としているのは珍しい。

宮殿には他にあまり例のない特徴がいくつかある。まず、軒裏一面を雲の浮き彫りとしている点である。この技法は、前年の宝永2年に建てられた念来寺鐘楼（松本市有形文化財）が我が国現存最古で、これを参考にした可能性が高い。次に、墓股内部に海老・蟹・蛸というふつうの花鳥風月でない題材を用いている点である。ユニークである一方、

墓股の脚には江戸前期までの様式とされる若葉の彫りが残っており、伝統的な技術の上にさらに斬新さを求めた工匠の姿勢が伺える。

以上の通り、県内では発達した華やかな装飾を備えるが、全国的には江戸中期の寺社建築は、立体化した彫刻による装飾が増加する傾向にあるため、全国的にみても個性のある存在といえる。

建築年代と大工

宝永3年(1706)の「奉建立十一面観世音堂并宮殿」の棟札があり、観音堂の建築様式と一致するので、宝永3年に建てられたと考えられる。この棟札から、棟梁金原又七、墨棟梁金原作助、手斧始金原五郎七、同金原勘五郎、葺大工松本金兵衛、宮殿彫物細工曾根原庄太郎重光が判明する。外陣鏡天井の龍は絵師窪田岩之丞で、堂内の宝永3年絵馬の絵師と同じで、宮殿の長押・貫にある鳥獣画も窪田が描いた可能性がある。

棟梁の金原氏は天正4年(1576)の仁科神明宮造替に金原周防守長吉とあるのを初出として、大町・北安曇地域を中心に活動した名工の一族である。若一王子神社関連では承応3年(1654)に本殿を再建した金原周防・同五兵衛がいる。しかし、宮殿の高欄に大仏様板墓股に斗を載せた特異な部材を付けている点くらいしか類似点がなく、墓股や木鼻・絵様などで継承されている点は見られない。

曾根原氏は、貞享元年(1684)の長光寺薬師堂宮殿(安曇野市)を造った曾根原安右衛門の名が今のところ最初で、幕末まで同姓の大工が知られている。

建物の状態

観音堂は、平成19年に茅葺屋根の葺替と軸部の修理が行われている。

7 指定理由及び根拠

(1) 長野県宝等の指定等に関する基準

第1 長野県宝の指定基準

(7) 建造物

(ウ) 歴史上重要なもの

(オ) 流派的又は地域的特色において顕著なもの

(2) 指定理由

若一王子神社観音堂は、江戸時代中期に属する三間堂で、保存状況も良好である。棟札によって、建築年代、大工名が明確であり、平面形式、向拝の木鼻・手挟などに特徴があり、江戸時代中期における安曇地域の大工の作風や技術・技量を顕著に示しており、県内の建造物の歴史を知る上で重要な建造物である。

観音堂内に安置された宮殿は、観音堂と同時の制作で、軒裏一面を雲の浮き彫りとしている点、墓股内部に海老・蟹・蛸という海にまつわる動物が扱われる点など、伝統的な技術の上に斬新さを強く求めた工匠の姿勢が伺え、観音堂と一体として重要な建造物である。

8 調査者氏名 後 藤 治, 吉 澤 政 己

9 調査表作成年月日 平成23年8月30日

【参考文献】

『長野県の近世社寺建築』長野県教育委員会(昭和57年)

『長野県史』美術建築資料編2 建築、長野県史刊行会(平成2年)

『幅具義先生遺稿集ひとすじの道』幅具義先生遺稿集刊行会(平成15年)

長野県宝候補物件調査票

- | | | |
|--------------|-----------------------|-----|
| 1 種 別 | 建造物 | |
| 2 名 称 | こうきゅうじやくしどう
光久寺薬師堂 | 1 棟 |
| | つけたり ずし
附 厨子 | 1 基 |
| | うちずし
内厨子 | 1 基 |
| | むなふだ
棟札 | 1 枚 |
| 3 所在地 | 長野県安曇野市明科中川手5773番 | |
| 4 所有者の住所及び名称 | 同 上 | 光久寺 |
| 5 管理者の住所及び名称 | 同 上 | |

6 現 状

(1) 沿 革

清水山光久寺は犀川にそそぐ会田川左岸、長峰丘陵の高台に立つ真言宗高野山金剛峰寺の末寺で、現在は無住である。かつては字塔中山を中心として大伽藍を構えていたといわれている。戦国時代に甲斐武田氏の信濃進攻時兵火に遭い、建物の大半を焼失し、その後、現在地に移ったと伝えられる。

当寺本堂に安置されていた（現在は庫裡に安置）木造日光・月光両菩薩立像（県宝）は、胎内墨書銘により、鎌倉時代末期の文保元年（1317）に開眼供養された仏像であることが明確である。

現在地に移建後もなお寺格を具えていたことが慶安5年（1652）の『麻績組大足村検地帳』によって知られ、また、慶安3年には、光久寺薬師如来の宝塔（宮殿）が痛んだので、大足・清水両村の衆力によって再興されている（薬師堂内宮殿扉裏墨書銘）。

その後しばらくして、延宝3年（1675）住持存清の代にも寺の再興があった（明治9年『長野県町村誌』）と伝えている。これらから、一時荒廃していた寺もこのころ寺運を回復して、しばらくして薬師堂建立となったものであろう。

光久寺薬師堂の前庭に、元禄2年（1689）造立の阿弥陀如来真言碑が立っている。薬師堂と阿弥陀如来の関係は不明であるが、あるいはこの碑が翌年の薬師堂建立に先立って、その工の悉皆成就を祈念して造立されたものであるのかもしれない。

(2) 構造形式

概要

薬師堂は、棟札により、元禄3年（1690）6月に新しく建立されたことが明らかである。この棟札には、松本藩主水野忠直を大檀那とし、大足村の滝沢九郎兵衛が造立の発願主となり、安曇郡大町村の宮大工曾根原安右衛門が棟梁となって建立したことなどが記されている。また、この堂の完成した年の9月には、堂の板小壁に百人一首歌絵が描かれている（小壁墨書）。

さらに元禄5年には向拝に銅造鰐口が奉懸されている（鰐口陰刻銘）。その後の薬師堂の修理については、修理棟札が保存されていないため明らかではないが、堂の軒に掲げである寄付銘板によれば、明治40年薬師堂修復・大正4年薬師堂修復・昭和52年薬師堂屋根改装のことが知れ、また、『明科町史』によれば、昭和4年屋根葺き替え・昭和10年それまでの茅葺を瓦葺に改めたことを伝えている。平成8年に現在の鉄板葺に改められた。

構造形式

薬師堂は、梁行三間、桁行五間、寄棟造、鉄板葺（もと茅葺）、妻入の仏堂である。桁行五間のうち、四間部分が主屋で、一番奥の間（実寸で4尺）の部分は下屋となっている。軒は一軒疎垂木であるが、これは、前述の屋根改造による。平面は、奥行の半分の位置に結界を設け、内陣は背面側の奥行き一間を通しの仏壇とする。

軸部は、自然石の基礎に、柱を立てる。柱は、側柱は太さ16cm前後の角柱とし、内部に立つ内陣・外陣境の柱と仏壇前面の柱を太さ23cm前後の角柱とする。側柱に縁長押、内法長押を打ち、腰貫2段・飛貫を通し、縦羽目板張りとし、柱頂部に丸桁を置く。縁は切目縁で、縁先に軒を支える柱を立てる。この支柱は縁束の柱筋に立ち、縁框を受け、飛貫を通し、軸部の側柱とは虹梁で繋ぎ、柱頂部に舟肘木・丸桁を置いて垂木を受けている。支柱のうち正面中央の2本の柱は太さ15cm前後のやや太めの向拝柱とし、側柱との繋ぎ虹梁の下端に錫杖彫りを施し、舟肘木には忍冬唐草文を描く。この向拝の前面に木階3級を設けている。

母屋の正面は、中央間を両折れの腰高格子、脇間を嵌め殺しの腰高格子戸とする。内法長押上の四周の小壁板には百人一首の墨書と彩色の歌人を描く。

母屋内部、外陣・内陣境の結界の建具は、三間とも低い位置に腰貫を入れ、格子戸とする。中央間は嵌め殺しとし、脇間は引き違いとす。

外陣・内陣境の結界に立つ円柱は、粽付きで、金欄巻きの彩色を施す。円柱には頭貫を通し、木鼻を付け、台輪を置く。組物は出組の詰組とする。頭貫は全体が彩色されており、熨斗包・輪宝・八双を描く。木鼻のうち側面がわの木鼻は、上下二つの渦文・七宝繋ぎの地紋を描く。外陣側に突き出た木鼻は象鼻で、胡粉彩色を施す。組物も彩色され、詰組の羽目板には竹林・虎、牡丹・唐獅子の絵が描かれている。結界の脇間は内法貫を通し、貫の表面に宝相華文を描く。内法貫上の羽目板には簫を吹く飛天、蓮華を持つ飛天が描かれている。外陣の小壁には、彩色絵がある。題材は、扇を持つ人物、黒い鳥、弓箭の争い、観瀑人物、黒馬（親子）、鶴退治、児攫い驚（こさらいわし）、梟と群雀。天井は棹縁天井とする。

内陣の円柱は、天井上の丸桁まで延びる。結界に立つ円柱とは、虹梁で繋ぎ、この位置から下に金欄巻きの彩色を施す。虹梁には錫杖彫・眉を施し、八双・円・宝相華を描く。仏壇通りは、各間とも虹梁形の貫を通し、挿肘木で受ける。貫には若葉・渦・円などを描く。なお、仏壇通りの小壁には蓮池・孔雀、結界裏脇間上の小壁には蓮池を、側壁には草花文を、それぞれ彩画する。

内陣は畳敷きとし、天井は竿縁天井とする。仏壇は母屋背後の下屋の位置に造られている。中央の仏壇は腰高に框を入れ、板張りの須弥壇とし、厨子を置く。脇間の仏壇はこれより一段低い位置に框を入れる。

厨子は春日厨子で、内部にさらに一回り小さい厨子を安置する。春日厨子は正面及び両側面に板扉を設け、全体を弁柄で彩色する。扉上下に長押を打ち、下長押の下、内法長押上の羽目を蓮子状にして緑青の彩色を施す。正面の扉は黒塗り、側面の扉は弁柄塗りとする。内部の厨子は白木仕上げで一部に彩色を施す。扉裏に「再興」・「慶安三年」の墨書があり、慶安3年（1650）造立のものと推定される。

薬師堂の特徴

当堂は、平面が奥行き方向に深く、軒が深く、支柱を立てて軒を支えている外観に特徴がある。この形式は、室町時代後期に建立された盛蓮寺観音堂（大町市、重要文化財）・松尾寺薬師堂（安曇野市、重要文化財）にみられる。光久寺薬師堂を建てた大工曾根原安右衛門は大町の住人であるから、これらの見馴れていた堂を模範として、この堂の形態を決めたと考えられる。

次に、堂内外ともに、極彩色の絵画や文様で装飾が施されており、絵画の主題や文様は江戸時代中期の社寺建築装飾の特色をよく示している。とくに、建築彫刻が少なく、絵画の題材が様々である点は、他の仏堂にみられない特徴である。

建物の状態

薬師堂は、平成8年に鉄板葺に葺替えられている。無住である。

7 指定理由及び根拠

(1) 長野県宝等の指定等に関する基準

第1 長野県宝の指定基準

(7) 建造物

(ウ) 歴史上重要なもの

(オ) 流派的又は地域的特色において顕著なもの

(2) 指定理由

光久寺薬師堂は、江戸時代中期に属する奥行きの深い平面をもつ仏堂で、周囲の縁束を上に延ばして柱として深い軒を支える構造としているのが特徴である。室町時代後期に建てられた盛蓮寺観音堂（重要文化財、大町市）、松尾寺薬師堂（同、穂高町）と同様な構造で、地域性がよく現れている。

内部は、前半を外陣とし、後半を内陣としている。彩色がよく残されており、柱上部や小壁を極彩色としており、外部の小壁上には百人一首と歌人を画き、外陣内部には天女、黒駒、牡丹・唐獅子、竹・虎など、内陣には桐・鳳凰、蓮などを描いている。彫刻が少なく、彩色を多用する点は、大工の作風を示すものと考えられる。棟札から薬師堂の建築年代は元禄3年(1690)で、大工棟梁は大町村(大町市)の曾根原安右衛門であったことがわかる。拳鼻の渦や虹梁の渦・絵様若葉などにも大工の個性がよく示されている。

当堂は、江戸時代中期における大町地方の大工の作風や寺院建築の形式をよく示しており、県内の建造物の歴史を知る上で重要な建造物である。仏壇の厨子は、彩色等から堂と同時期のものと推定され、その中に安置された一回り小さい厨子は慶安3年(1650)の銘があり、当堂の変遷が知られ、ともに当堂と一体のものとして保存すべき重要な建造物である。

8 調査者氏名 後 藤 治, 吉 澤 政 己

9 調査表作成年月日 平成23年8月30日

【参考文献】

『長野県の近世社寺建築』長野県教育委員会（昭和57年・平成3年）

『長野県史』美術建築資料編2建築、長野県史刊行会（平成2年）

『幅具義先生遺稿集ひとすじの道』幅具義先生遺稿集刊行会（平成15年）

長野県宝候補物件調査票

- 1 種 別 建造物
- 2 名 称 ちょうこうじやくしどう 長光寺薬師堂及びくうでん 宮殿 1棟及び1基
- 3 所在地 長野県安曇野市明科光691番4
- 4 所有者の住所及び名称 同 上 長光寺
- 5 管理者の住所及び名称 同 上

6 現 状

(1) 沿 革

医王山長光寺は、犀川右岸の長峰山（標高933m）の西麓にある。寺は真言宗に属し、高野山金剛峯寺の末寺である。松本藩主水野氏が江戸時代中期の享保9年（1724）に編纂した『信府統記』によると、「高野山竜光院末寺ナリ、（中略）当寺開基年数知レズ」となっていて、当時すでに創建年代や開基などは不明となっていたこと、またかつては高野山金剛峯寺子院の竜光院の末寺であったことがわかる。

文献史料上での長光寺の初出は、松本藩主石川氏が天正18年（1590）以後に実施した天正差出し検地の記録である『両部郷村御朱印御高附』に、「一百六石七斗七升 光村此内（中略）壺石ハ長光寺・宗源寺」とあるもので、当時長光寺・宗源寺（現宗林寺）の両寺合わせて朱印高1石を所有する寺であったことが知られる。

延宝元年（1673）の『麻績組草高並小物成指出帳』中には「真言宗源明山長光寺」と見えていて、山号が現在と異なっている。この頃の住職は権大僧都秀恵と推定される。秀恵は、長光寺の中興開山で、延宝8年（1680）9月29日に示寂した由を、寺蔵の『長光寺世代表』は伝えている。なお寺の伝承では、秀恵の中興開山の時期を天正10年（1582）としているが、示寂の年から考えると疑問である。

中興開山秀恵からかぞえて第4代住職に権大僧都日精がいる。日精については、元禄4年（1691）の『麻績組草高並小物成指出帳』の「寺社方之覚」に、「医王山長光寺 光村住持日清能化」と見え、ついで、元禄11年（1698）の『麻績組光村神社仏閣道法色々書上帳』に、客殿・庫裡・薬師堂・山門の規模、2反1畝22歩の寺領の畑、本尊不動立像、薬師堂の薬師如来坐像長1尺4寸2分などの記事とともに、「真言宗高野山竜光院末寺 医王山長光寺住持日精法印」の記事が見える。

また、日精の位牌には、「正徳五乙未歳（1715）二月廿三日 生年六十六歳 薬師堂・門寺・諸事建立之住持也」と記されていて、寺運の興隆に努めた傑僧であったことを伝えている。

(2) 構造形式

概要

長光寺薬師堂の須弥壇に据えられている宮殿の天井板には、薬師堂ならびに宮殿の建立や改修について、年代を追った4項目からなる墨書銘が記されている。以下この銘文に沿って、薬師堂と宮殿の建築の沿革をみていく。

第一の銘文は、旧薬師堂の建立事情を記す。薬師堂の本尊の薬師如来像について、「本尊恵心僧都御作」としている。ただし、長光寺薬師如来坐像（像高42cm、桧材一本造、彫眼、彩色）は、像容に鎌倉様式を多分に表出していて、鎌倉時代末期から室町時代初期のころに製作された仏像とされる。なお、この薬師如来像は秘仏とされ、20年あるいは60年に一度の御開帳が行われ、虫除け加持・お日待ちなどの加持祈禱も行われて霊験あらたかな薬師と崇められてきたという。第一の銘文は、この薬師如来像を安置していた薬師堂が大破したので、光村山崎喜兵衛が施主となり新たに三間四面の堂を建立し、承応2年（1653）3月12日、この日竣工したこと。また、当時住職は中興第2代の良海で、堂建立の大工は平十郎であったことなどを伝えている。大工平十郎については詳らかで

ない。

第二の銘文は、堂主尊の薬師如来像の修理と十二神将像・宮殿の建立事情を記す。第4代住職白精法印代の貞享元年（1684）に、薬師如来像が傷んだので修理をし、あわせて薬師如来の眷属である十二神将像の造立と本尊を安置する宮殿を建立し、7日間の開帳をしたこと。その施主は光村の山崎氏与七郎・同村長八郎・田沢村の花村弥七郎・その他の旦那で、それら多くの人々の助力を得、不足分は住職日精が出費したこと。大工は大町村の安右衛門、仏師は京都の清兵衛であったことなどを記している。

大工安右衛門は曾根原安右衛門で、曾根原氏は中世からの宮大工として松本平に名の知れた金原氏に、江戸時代初期頃から師事して大工の技を磨いた家筋で、寛文12年（1672）の『大町村五人組宗門改帳』に、大工金原次郎助の内弟子として安右衛門の名が見える。長光寺薬師堂の宮殿を造った安右衛門はその後元禄3年（1690）には光久寺薬師堂を建立している。

第三の銘文は、現薬師堂の建立事情を記す。承応2年（1653）に建立した旧薬師堂は、それから50年を経た元禄16年（1703）に到って破損し、七間四面（七間は三間の誤りか）の新薬師堂を住職白精が自力で改築し、落慶にあたり2週間にわたって開帳されたこと。この建立に、金子200両・人足5000人・大工2000人を要したこと。建立の大工は大町村の金原作助・同村平林小右衛門、木挽は同村八之丞であったことなどを記す。これらの記事によって、新薬師堂の建立はすこぶる大掛りなものであり、棟梁金原氏の率いる大町の大工衆らが大半してこれに従事したと推定される。金原作助は、宮大工として墨引（設計）を得意としており、宝永3年（1706）に若一王子神社観音堂、さらに宝永8年に同社三重塔の墨引棟梁をつとめている。

第四の銘文は、宮殿とこれに安置している薬師如来像光背の修理事情を記す。貞享元年（1684）に大工曾根原安右衛門によって建立された宮殿は、正徳3年（1713）まで組物が不足した状態のままで、10年前に薬師堂を建立した大町村大工金原作助に託して、三手先組物に改めたこと。また、薬師如来像の光背を松本城下の仏師庄右衛門に託して調製したこと。この費用は、光背分を施主の光村の山崎氏与七郎らの施入でまかない、宮殿改修費などは住職白精がまかなったことなどを記している。

なお、天井板の墨書銘は白精の弟子白栄（第五代住職）が書したことを末尾に記している。

以上の銘文を要約すると、薬師堂は、おそらく中世末期か江戸初期に建立のものが大破したので承応2年（1653）に改築したが、これも50年ほどで大破し、元禄16年（1703）に新堂を建立した。これが現存の薬師堂ということになる。また、宮殿は、貞享元年（1684）に建立されたが、組物不足を補うため正徳3年（1713）に改修したものということになる。

構造形式

（1）薬師堂

薬師堂は、梁間三間（6.70m）、桁行三間（7.32m）、寄棟造、茅葺（鉄板仮葺）、妻入の仏堂で、一間の向拝（鉄板葺）をつける。方三間であるが、奥行きが少し長い。平面は、奥行きの半分を外陣とし、内陣の後半に仏壇を造り、中央に宮殿を安置する。

向拝は、自然石の上に方形礎盤を置き、面取り角柱（太さ19cm）を立てる。柱に水引虹梁を架け、両端に独特の繰形の象鼻をつける。組物は連三斗・実肘木とし、中備は墓股とする。軒は、一軒繁垂木で、打越垂木とする。母屋との繋虹梁はなく、細長い手挟（彫りの浅い渦を施す）を入れる。

母屋は自然石（一つは石灯笼の部材を転用）の上に円柱を立て、縁長押・内法長押を打ち、頭貫を通す。頭貫には独特の繰形の木鼻を付け、下に渦、上に若葉の木鼻、下に渦・若、上に渦があり、先端が上向きの木鼻の2種類がある。母屋の円柱の内、内陣まわりの円柱は外側を八角のままとして円に仕上げていない。柱の太さは29cm前後であるが、結界部分の柱の太さは31cmとやや太い。

側柱上の組物は、平三斗・実肘木とし、中備は撥束・実肘木とする。軒は二軒繁垂

木とする。地垂木・飛檐垂木に反り増しはない。縁は四方に切目縁を周す。縁の正面側のみ擬宝珠高欄を付ける。建具は、正面中央を引違いの腰高格子戸とするほかは、引違い板戸とする。内陣まわりは腰貫二段を通し、縦羽目板とする。正面中央の柱間は、縁長押・内法長押に軸吊孔があり、また、方立の痕跡もあり、当初は両開きの扉であったことがわかる。

内部は、内陣を外陣より一段高くし、両陣とも現在畳を敷くが、かつては板敷きで

あったと考えられる。結界は、結界筋両端の板壁に接して付柱（八角柱の半分）を立て、敷居・鴨居を残しており、中央間は嵌め殺し戸、脇間は引違い戸であったと推定される。

結界筋の太い円柱は、正面側の柱から大虹梁を架け、中央に大瓶束を立て、束上の組物は三斗・通肘木とし、これより結界までの中央間通りの天井を棹縁天井とする。外陣のその他の天井は化粧屋根裏とする。結界筋の太い円柱は、内法貫・頭貫（木鼻付き）を通し、組物は三斗・通肘木とする。大虹梁には上面端に鯖尻を大きく付ける。

内陣の宮殿前に立つ柱は、内法貫（虹梁形）・頭貫（木鼻付き）を通し、組物は三斗・通肘木とする。結界から宮殿前に立つ柱までの中央間通りの天井は棹縁天井とする。その他の天井は化粧屋根裏とする。

宮殿前に立つ柱と背面の側柱とは頭貫で繋ぐ。この頭貫下端・側柱・宮殿前の柱の背面側には小穴が残り、以前には宮殿の両脇は板壁となっていたことがわかる。宮殿の組物増設にともなって高くなった組物・屋根をみせるため、宮殿前の柱の挿肘木と内法貫の位置が上に上げられている。この痕跡が柱に残っている。この内法貫には江戸時代前期の様式を示す木瓜形曲線のある渦と若葉を浅く彫っている。

須弥壇は、前柱から少し中へ入った位置より奥に作り付ける。中壇を一段設けるだけの簡素なもので、その中央に宮殿を置く。

(2) 宮殿

宮殿は、方一間、入母屋造、板葺、妻入の建物である。土台の上に円柱を立て、腰長押・縁長押・内法長押を打ち、頭貫（木鼻付き）を通し、台輪を置く。台輪より下には彩色があり、柱は黒漆塗の上に金箔を散らし、縁長押・内法長押は朱漆塗とし、草葉文切り金具の釘隠を打つ。頭貫木鼻は黒漆塗とし、渦・木口は朱漆塗とする。正面中央、内法長押の上に墓股が付くが、頭貫より上の台輪を支えるような変則な形となっている。

組物が三手先となる以前には、中備として台輪より上に収まっていたと推定される

この墓股は肩に草葉の鰭を付け、墓股内部に花文の彩色を入れる。

正徳3年(1713)に増設された三手先は各手に反り増しの強い禅宗様の尾垂木をみせ、詰組とされる。なお組物とその周辺は彩色をせず、樺材の生地を現す。軒は二軒繁垂木とし、黒漆塗とする。妻の拝みに彩色のかぶら懸魚を付ける。

扉は両開き棧唐戸とし、上の鏡板に四葉金具を打つ。総体に、彩色部分は貞享元年(1684)の創建時、生地部分は正徳3年の三手先改修時のものといえる。殿内天井板に前述した薬師堂・宮殿の施工に関する墨書銘がある。

建築年代と大工

宮殿内の墨書から建築に関して次のような歴史が判明した。古い薬師堂が大破したので承応2年(1653)に薬師堂(2次薬師堂)を建立した。貞享元年(1684)に、薬師如来を修理してこれを安置する宮殿を曾根原安右衛門が作成した。元禄16年(1703)に大町村の金原作助らによって薬師堂(3次薬師堂＝現薬師堂)が建立され、

正徳3年(1713)に金原作助によって宮殿の組物が三手先に改められた。このうち、向拝の木鼻は目頭に当たる部分にも突起をつける独特の形で、これは、寛文12年(1672)建立の小野神社本殿(塩尻市)、元禄2年(1689)建立の八幡神社本殿(旧堀金村、旧穂高神社本殿)、宝永3年(1706)の若一王子神社観音堂宮殿などにみられるの

で、元禄16年(1703)の造営で矛盾はない。

また、薬師堂は正面向かって左側の側柱上の小屋束の一つの2面にあり、西面には「此堂建主法印白精午年」、北面には「大工大町 金原作助、平林小右衛門」とある。宮殿内の墨書にある住職白精が薬師堂竣工前年の元禄15年に記したこと、大工が宮殿内の墨書にある大町村金原作助・同村平林小右衛門と一致する。このことから、少なくとも小屋組の工事は元禄期に行われたことがわかる。

また、組物について木鼻のなかには宝永3年(1706)の若一王子神社観音堂の木鼻と似たものが使われている。一方、組物と垂木の間隔をみると、六枝掛になっておらず、小屋組と軸部が同時期かには若干の疑問がある。また、結界の位置にある太い円柱は、側柱と比べて風蝕に差がある。

これらから、元禄16年(1703)の建立は、全くの新築ではなく、向拝新設や小屋組改築をとまなう大規模改修であったと推定される。

建物の状態

昭和45年(1970)に、屋根を茅葺形のカラー鉄板葺に改めている。

7 指定理由及び根拠

(1) 長野県宝等の指定等に関する基準

第1 長野県宝の指定基準

(7) 建造物

(ウ) 歴史上重要なもの

(オ) 流派的又は地域的特色において顕著なもの

(2) 指定理由

長光寺薬師堂は、江戸時代中期を代表する三間堂で、外陣・内陣境の結界が側柱筋とずれている点に特徴がある。この形式は宝永3年(1706)の若一王子神社観音堂にも引き継がれている。

宮殿内の墨書から薬師堂・宮殿の造営や本尊の修理の履歴がわかる点は重要で、安曇地域の複数の建築を建てた金原作助や曾根原安右衛門が関わっており、江戸時代中期における安曇地域の大工の作風や技術・技量を知る上で、重要な建造物である。

内部に立つ柱は前身の薬師堂の柱と推定され、本尊と同じ中世の柱の可能性があり、主たる外観は元禄16年(1703)のものであっても、内部に中世に遡る部材を残している点も重要である。

宮殿は、堂の履歴を示す歴史資料として重要であり、建築としても三手先組物を持つなど本格的な構えを備え、江戸時代中期における安曇地域の大工の作風や技術・技量を知る上で、重要な建造物である。

8 調査者氏名 後 藤 治, 吉 澤 政 己

9 調査表作成年月日 平成23年8月30日

【参考文献】

『長野県の近世社寺建築』長野県教育委員会(昭和57年・平成3年)

『長野県史』美術建築資料編2建築、長野県史刊行会(平成2年)

『幅具義先生遺稿集ひとすじの道』幅具義先生遺稿集刊行会(平成15年)

長野県名勝天然記念物候補物件調査票

- 1 種 別 天然記念物
- 2 名 称 ^{かりだ}雁田のヒイラギ
- 3 所在地 長野県上高井郡小布施町大字雁田 789 番地 1
- 4 所有者の氏名 埼玉県狭山市大字水野 1195 番地 3 呉羽敏正
- 5 管理者の氏名 所有者に同じ
- 6 現 状

(1) 生育地

候補物件は、小布施町大字雁田の集落内の個人宅の庭先にある。小布施町と高山村を画する雁田山の西麓に位置する雁田集落は、『吾妻鏡』の寿永三（1184）年二月三十日条にその名が出るのが初出（「狩田郷」）である。雁田山の主稜線や尾根上には、岩質の山体や巨岩を対象とした信仰空間が展開していた様相がうかがわれ、山麓部には重要文化財の薬師堂をもつ浄光寺、葛飾北斎の天井絵で知られる岩松院など、現在でも多くの寺院が残る。

旧雁田村は、この山と霊場を背景に成立した村落で、雁田山麓を南北に走る街道筋といくつかの寺院の門前とが交差する空間に成立したことが近世の絵図などから読み取れる。この集落の空間構成は近世以来ほとんど変わっておらず、当該樹木は少なくとも江戸時代からの地割を今に伝えている雁田地区において、同地区を南北に縦貫する道路に面して植えられ、長い年月にわたり「都住のヒイラギ」と呼ばれて親しまれてきた樹木であり、地域景観を代表する樹木と言える。

(2) 生育状態

生育地において、当該樹木は樹高約10mで、地際から4本に分岐した幹は、胸高（地上130cm）の幹周がそれぞれ、174cm（北側）、132cm（東側）、133cm（中央）、161cm（南側）に達する巨樹である。樹勢は良く、外観からは幹部の腐朽等は見られない。

(3) 保存の経緯

候補物件は、昭和 47 年に小布施町の天然記念物に指定され、指定名称「都住のヒイラギ」として保護管理されてきた。

7 指定理由および根拠

(1) 長野県宝等の指定等に関する指定基準

第 8 長野県天然記念物の指定基準

(1) 植物

ウ 植物分布の限界地 キ 大木、名木、奇形木等

(2) 指定理由

ヒイラギ (*Osmanthus heterophyllus*) は、モクセイ科モクセイ属の常緑小高木

で雌雄異株、本州以南に分布する暖地性の植物である。ツヤのある葉の縁に鋸歯があるのが特色であるが、老樹になると鋸歯が失われる特徴がある。当該樹木の葉も、鋸歯が失われて、老樹の特色がはっきりあらわれている。

本県指定の天然記念物のヒイラギとしては、すでに下伊那郡高森町の「市田のヒイラギ」（単幹で幹周は約340cm）があるが、ヒイラギの分布を勘察した場合、これほどの大木で県北部に分布する個体は例がない。当該樹木は本県のヒイラギの天然分布の北限を越えた地域に位置するものであり、寒冷地の本県において、照葉樹を植栽して大切にしたい地域の人々と自然との結びつきを記念する貴重な個体である。

近世の村絵図を分析すると社寺地の周囲には樹種や特色がわかるほどの精密さで社叢と巨木が描かれており、雁田集落の人々が古くから巨樹・古木に対する愛着を持っていた様子がうかがわれる。周辺の住宅も軒並み庭の手入れが良く、それぞれに庭の象徴となる樹木を植栽している。当該樹木は、そのような地域の愛着のなかで今日まで保護されてきた地域の景観を代表する樹木であり、老成した大木であるだけでなく、植物学の資料としても学術的に価値が高い。

以上のことから、当該樹木は長野県天然記念物の指定基準（１）植物 ウ 植物分布の限界地、キ 大木、名木、奇形木等、にふさわしいものと考えられる。

（３） 保存の要件

候補物件は、地域景観を代表する樹木であることから、周辺の環境の整備に努めて、文化財としての価値を高め、多くの人々に親しまれる天然記念物として活用することが望まれる。

8 調査年月日 平成 21 年 11 月 6 日

9 調査者氏名 亀山 章

10 調査票作成年月日 平成 23 年 8 月 10 日

長野県天然記念物指定解除物件調査票

- 1 種 別 天然記念物
- 2 名 称 はら
原のシダレザクラ
- 3 所在地 長野県上水内郡信濃町大字平岡 994の1
- 4 所有者の住所および氏名
 上水内郡信濃町大字平岡 1, 127
 原組総代 伊澤 民雄
- 5 管理者の氏名 同 上
- 6 経過措置の概要
 樹勢が衰えつつあった当該樹は、特に昭和 61 年頃から寄生虫(ネコブセンチュウ)の被害で弱まり、防除と施肥が行われた。平成 5 年より日本樹木保護協会の樹医によって大規模な蘇生外科治療(治療番号第 1208 号)が実施された。しかし、その後の樹勢回復は思わしくなく、平成 17 年に地元の樹木医グループの診断で再治療は継続されたが、平成 23 年 5 月に関係者によって完全枯死が確認された。
- 7 指定解除の理由および根拠
 (1) 長野県宝等の指定等に関する指定基準
 第 8 長野県天然記念物の指定基準
 (1) 植物
 キ 大木 名木 奇形木等

 (指定告示) 昭和 42 年 5 月 22 日 長野県教育委員会告示第 4 号

 (2) 指定解除理由
 完全に枯死したため
- 8 調査年月日 平成 23 年 7 月 18 日
- 9 調査者氏名 和田 清
- 10 調査票作成年月日 平成 23 年 8 月 16 日